



協力：ホビージャパン

ジオン公国軍陸戦用
量産型モビルスーツ
MS-09「ドム」
1/100スケール
マスターグレードモデル

MS-09 DOM

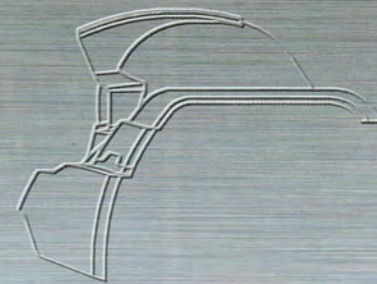
PRINCIPALITY OF ZEON MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT



MOBILE SUIT
MS-09

DOM

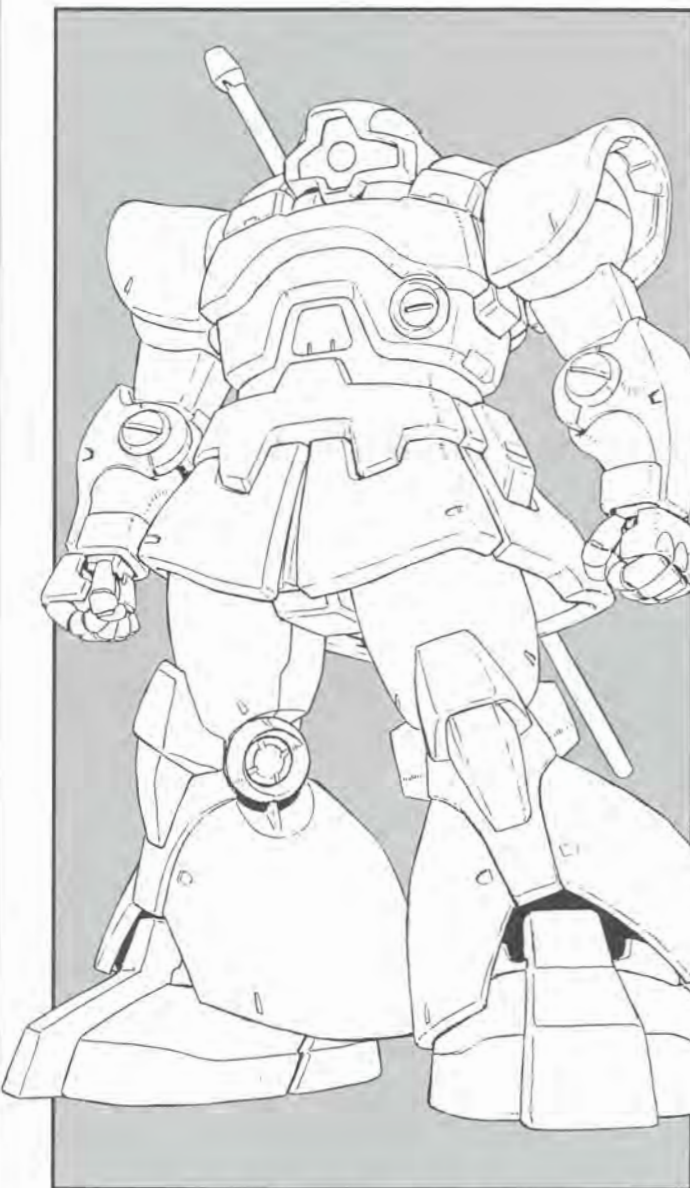
PRINCIPALITY OF ZEON
MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT



ジオン公国軍陸戦用
量産型モビルスーツ
MS-09「ドム」
1/100スケール
マスターグレードモデル

BANDAI 1999 MADE IN JAPAN

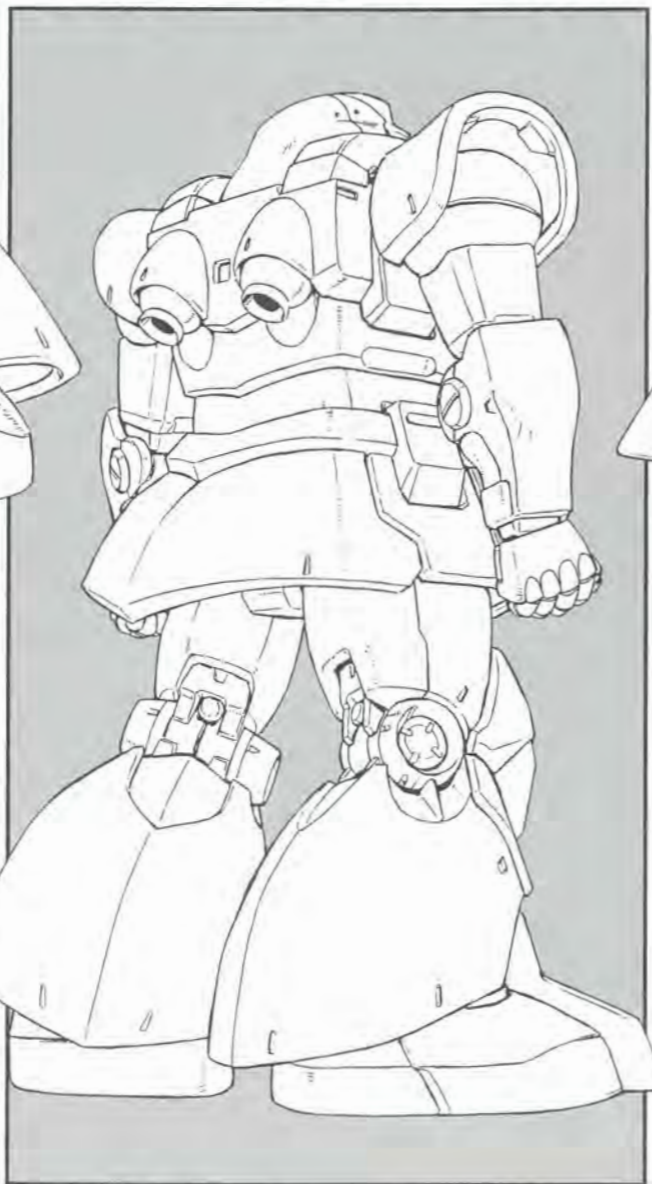




MS-07Gは、完全に陸戦用MSとして開発されたが、局地戦が進展するに連れて、固定武装しか持たないために戦場の状況に対応しきれないことが判明した。そこで、次に投入されたのが、Cシリーズと呼ばれるグフのバリエーションである。これは固定武装のバリエーションの選択肢を増やし、状況に応じた機種をその前線に投入するというものであった。ただし、ザクにしろグフにしろ、重力下における展開には多くの問題を抱えていた。それは端的に言えば、単体での展開速度が遅すぎたということである。本来は爆撃用の機体であったドガイYSとの組み合わせや、グフ自体の飛行プランなどもあったが、この問題はMS-09ドムの完成を見るまでは根本的に解決し得なかった。

ちなみに、グフ系の機体に、ほぼ例外なくマルチブレードアンテナが装備されているのは、この機体の投入に前後してドガイYSとの連携による展開が想定されていたため、通信及び遠隔操作能力を少しでも向上させるための苦肉の策だったのである。また、この期間中にMS-07系の機体の飛行試験型が多数試作されたが、結局、実用的な航続距離を得ることはできなかった。実際、機体のシルエットが一変するほどの改修が加えられ、それなりの結果が出てはいたものの、試験中にエンジンの不調から空中爆発を起こし、テストパイロットが負傷するなどの事故も頻発したため、07系の飛行計画は中止された。それでも、良好な結果が出た機体は数機が実戦に投入されている。

MS-09 DOM



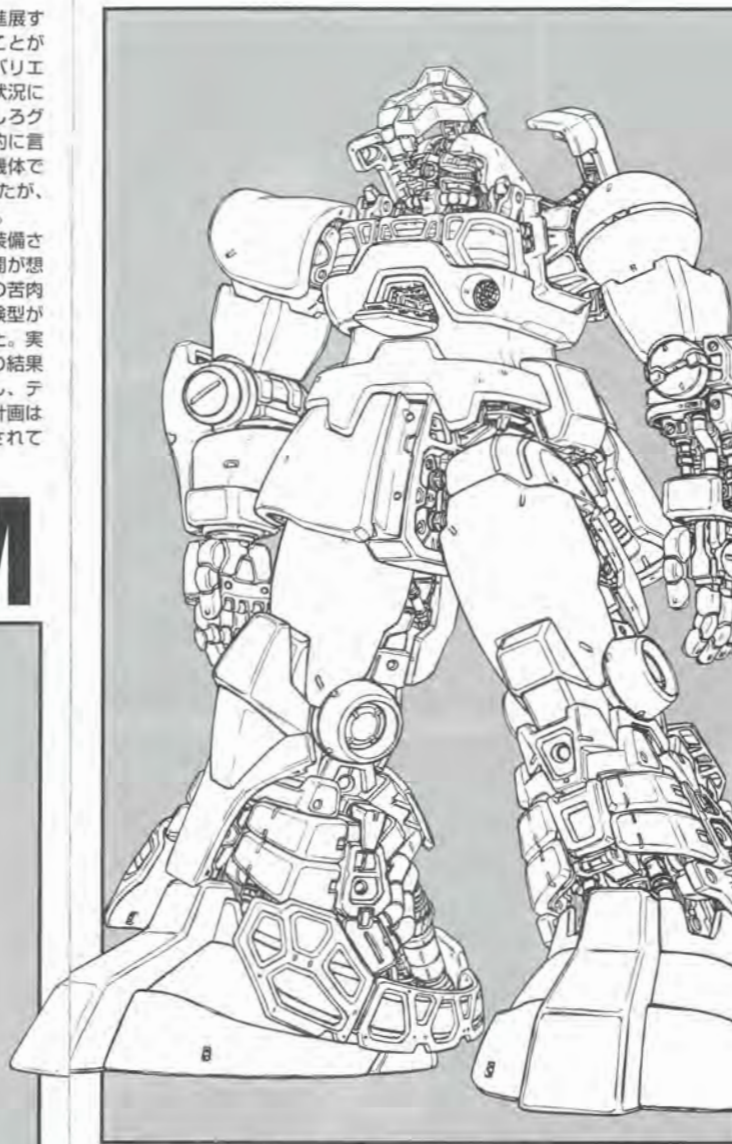
Conceptual illustration : Hajime-Katoki

U.C.0079年3月。公国軍は地球降下作戦を展開した。MSに対抗する兵器を持たない連邦軍に対し、公国軍は破竹の勢いで進軍していたが、実際には思わぬ障害に直面していたと言われている。

公国軍は当初、MS-06の内、C型やF型を地上用に改装して運用していた。陸戦用MSは、空間戦用の06Fを転用すれば十分だと思われていたからである。しかし、地球という環境は、本来空間戦用のMSであるザクの機動性を予想以上にそぎ落としてしまっていた。06型の機能向上機の試案は、C型の量産が本格化した0078年6月には提出されていたが、当時は生産性の向上を最優先事項としていたため、その計画は事実上頓挫していた。しかし、ザクはコロニーや月面における運用試験で得られたデータほど思うようには行動できず、加えて地勢や気象条件さらには機体冷却などの問題が、デッドウェイトとなった機能や装備を蝕んでいったのである。そして、現状のままでは今後の戦略にも支障を来す恐れのあることが判明したのである。

そこで公国軍が取った最初の対応策は、Fタイプから地上では必要のない空間戦用装備を取り除いた形の軽量型陸戦用の06Jの開発であった。Jタイプ自体は、第一次降下作戦直前に完成し、テストを兼ねて地球に降下していたが、本格的に前線に投入されたのは第二次降下作戦以後である。それでも、基本的に歩行が専用の車両でなければ移動できないという事実は、二脚歩行という破格の走破性をもってしても解決できなかったのである。もちろん、他方で新型陸戦用MSの開発も行われてはいた。0076年から推進されていた局地戦用MS開発計画の復活である。

地球進攻作戦は、決定から開始までの時間が短かったため、第一次、第二次作戦には間に合わなかったが、第三次降下部隊には新型陸戦用MS-07Gが配備され始めた。



BEFORE ARMAMENT

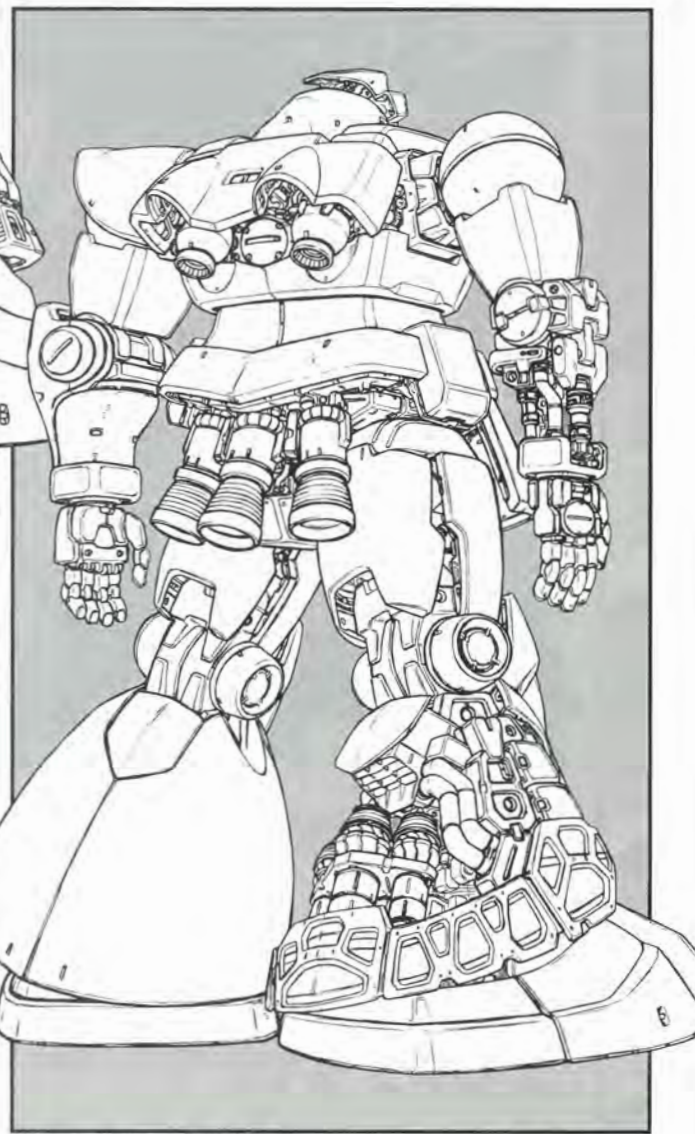
MS-07系の開発と平行する形で、対MS戦を想定したYMS-08系の機体なども開発されていたが、当時の陸戦用MS開発においては白兵能力よりも機動性が優先されていたためあって、計画は後に統合された。同じ頃、機体だけ試作された07系の機体において初めて採用されたのが、モノアイに縦軸方向のレールを加えるという試みと、ヒートサーベルの実用試験であった。特に十字に移動するモノアイは、フィールド戦闘などにおいて上方視界の獲得に有利であったため、後の機体にも採用されることとなった。

開発が統合されて後、YMS-09の開発が開始された。当初の計画では、湿地帯や沼沢地帯への投入も可能な純粋なホバークラフトユニットを装備した局地戦用MSを開発する予定だったが、熱核推進システムの実績のあるZIMMAD（ツィマッド）社が高効率の熱核ジェットエンジンの開発に成功したことにより、状況は一変した。ツィマッド社は、MSの開発においてZEONIC（ジオニック）社に遅れをとっていたものの、07系と競作した08系の開発実績によって、MS開発に本格的に参入した。そしてYMS-09は、最終的には熱核ジェットおよびロケットの複合推力で、足下にホバークラフトの技術を応用したユニットを装備する設計に落ち着いた。これによって不整地でも高速での移動が可能となり、重力下でのMS単体の移動能力は飛躍的に向上することとなった。後にプロトタイプドムと呼ばれるこの機体は、特に機動性においては航空機に匹敵する性能を示したという。ツィマッド社の開発担当技術者は、開戦から六ヶ月前には基本設計を終えていたといわれ、その機体シルエットは実際の機体よりもかなり細身に設計されていたらしい。その後、各部スラスターを内装することで

装甲形状が見直され、陸戦用MSの決定版と言える機体が誕生するのである。試作機はジオン本国の工廠で製造され、カリフォルニアベースにおいて実用試験が行われていた。その後、外部装甲に空力的な形状の改修を受けた後、ほぼプロトタイプ通りの形で量産が開始された。型式ナンバーはMS-09と決定し、ドムと名付けられた。生産は主にカリフォルニアベースとグラナダが担当したと言われている。

MS-09ドムの開発に並行して開発された武器に、360ミリバズーカ、いわゆるジャイアント・バズがある。当初、南極条約の発効によって使用できなくなった核弾頭に代わる武装として、既存の280ミリより強力な炸薬を弾頭とする320ミリレーザーサイズバズーカ砲がいくつか試作され、少数ながら06Rなどによって使用されていたが、カリフォルニアベースの軍港施設の工場から強力な360ミリ規格の弾頭が多数発見され、生産ラインも簡単に復旧できたことから、本来は戦艦用のその弾頭を射出可能な装備としてジャイアント・バズが造られることとなった。基本設計はレーザーサイズバズーカのひとつをスケールアップしただけのものだったが、結果的にそれまでに開発されたMS用携帯火器のうち、最大級の威力を持つものとなった。試射実験はカリフォルニアベース北部の試験場で行われ、後のビームライフルには及ばないものの、その威力は絶大で、一撃で巡洋艦クラスの航宙艦艇を大破させる威力を見せた。そして後にこの武装は宇宙においても多用されることとなり、ジオン本国やグラナダなどでも生産されることとなったのである。（ちなみに大戦末期、このバズーカに類似したMS用のビーム兵器や、あるいは人間サイズの携帯火器などが開発されたという説もあるが、詳細は不明である）。

なお、ドムを初めて受領した部隊が「黒い三連星」で知られる特務部隊であったことから、「ドム」のベーシックなカラーリングは黒、紫、灰色で踏襲されているらしい。



Mechanism illustration : BEE-CRAFT



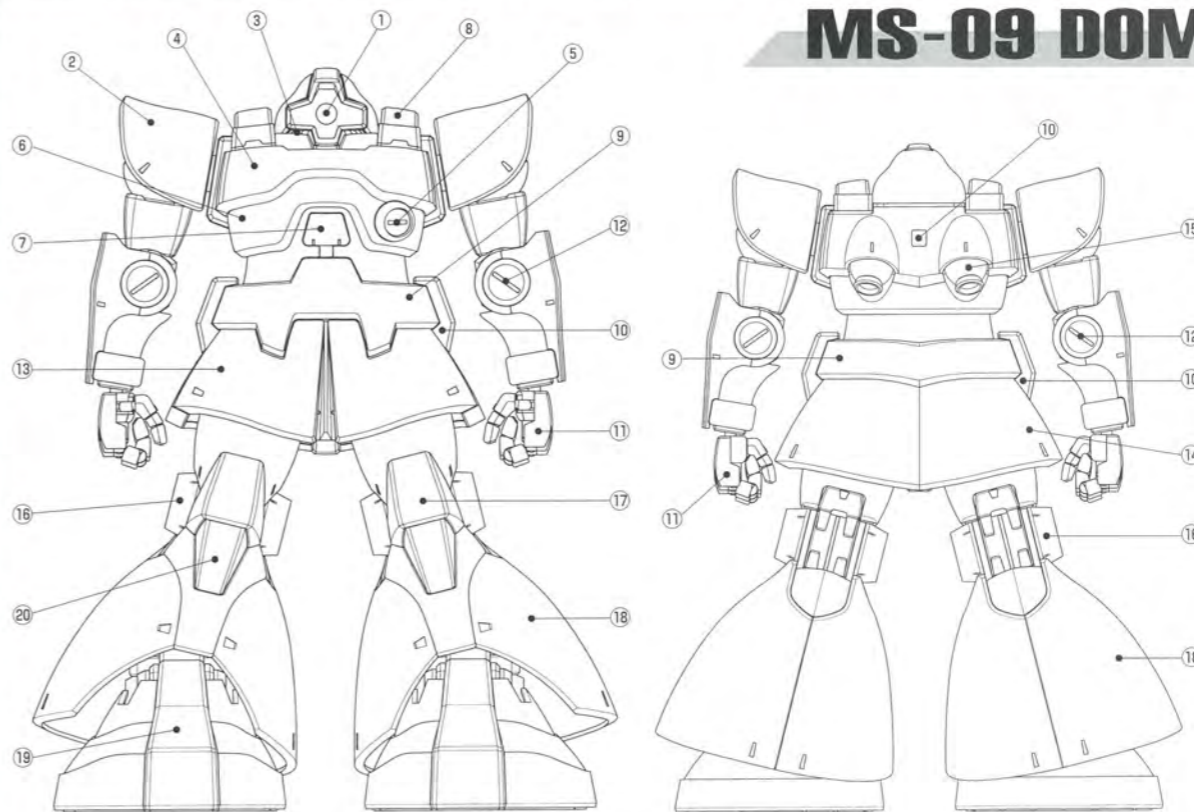
宇宙世紀
U.C.0079年1月。地球に最も遠い宇宙植民都市サイド3はジオン公国を名乗り、地球連邦政府に独立戦争を挑んだ。公国軍は巨大な人型兵器MS（モビルスーツ）を使い、宣戦布告と同時にサイド1、2、4を襲撃。コロニーのひとつを地球に落下させ、甚大な被害をもたらした。続く一カ月あまりの戦いで、ジオンと連邦は総人口の約半数を死に至らしめ、戦闘は長い膠着状態に陥った。

同年10月。連邦軍が開発したMSガンダム及びホワイトベースの出現により、戦況は変化しつつあった。連邦軍は急ぎMSの量産を進め、公国軍もまた、重力下における運用に対応した高性能MSの開発に成功していた。

中でも、大地を高速で疾駆する重MSドムの投入は、地上におけるMS戦の様相を一変させた。ホバー走行による高機動の移動能力は、MSによる戦線の展開速度を圧倒的に向上させ、連邦軍の抗戦部隊を翻弄した。特に“黒い三連星”が駆った3機のドムによる連携波状攻撃“ジェット・ストリーム・アタック”は、無敵を誇るホワイトベース部隊及びガンダムを苦しめ、同部隊にそれまでにない被害をもたらしたという。

結局、黒い三連星はガンダムの前に敗れるものの、MS-09の出現と連邦軍のMSの量産成功に伴い、戦闘は再び激化し、戦局は大きく変化していくのである。

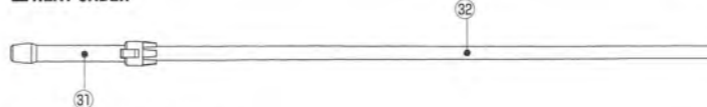
MS-09 DOM



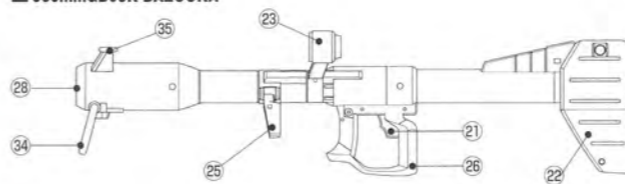
- | | | | | |
|------------------|------------------|---------------------|----------|------------|
| ①モノアイカメラ | ⑧ショルダーブロッカー | ⑮メインスラスタ | ⑳マガジン | ㉑セーフティラッチ |
| ②ショルダーアーマー | ⑨ウエストジョイントアーマー | ⑯ニージョイントアーマー | ㉒サイトスコープ | ㉒ウォーヘッド |
| ③パワーサプライヤー | ⑩オプションラッチ/ラッチカバー | ⑰ニーブロッカーアーマー | ㉓フォアハンドル | ㉓ロッドヒルト |
| ④プレストアーマー | ⑪マニピュレーター | ⑱レッグアーマー | ㉔フォアグリップ | ㉔ヒートロッド |
| ⑤スプレッドビームジェネレーター | ⑫エルボージョイントアーマー | ⑲サーフェイスセンサー/スタビライザー | ㉕グリップ | ㉕フォアストック |
| ⑥フロントパネル | ⑬フロントスカートアーマー | ㉑グランドセンサー | ㉖ダクト | ㉖キャリングハンドル |
| ⑦コクピットハッチ | ⑭リアスカートアーマー | ㉑トリガー | ㉗マズル | ㉗サイトセンサー |

注) この機体は、YMS-09から主に外部装甲形状などの設計変更を経て、U.C.0079年09月下旬から生産された量産型の機体内、グラナダ工廠において先行量産された初期バージョンです。

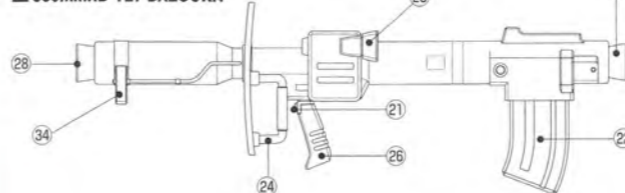
■ HEAT SABER



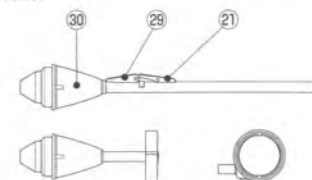
■ 360mmGB03K BAZOOKA



■ 880mmRB-T27 BAZOOKA



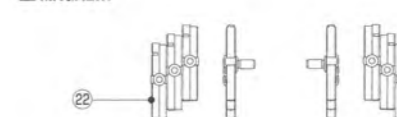
■ Sturm Faust



■ 90mm MACHINE GUN



■ MAGAZIN



パーツリスト

[使用材質] <成形品>(スチロール樹脂: PS)、(ポリエチレン: PE)、<ポリキャップ>(ポリエチレン: PE)

Aパーツ

Bパーツ

Cパーツ

Dパーツ

Eパーツ

Fパーツ

Gパーツ

Hパーツ

Iパーツ

Jパーツ (2枚)

Kパーツ (2枚)

Lパーツ

Mパーツ

R3パーツ

PC-121

※P.C(A)2個、P.C(B)5個、P.C(I)1個、P.C(K)2個は予備です。
 P.C(D)、(F)、(N)、(O)は使いません。

マーキングシール……………1枚
 ガンダムデカール……………1枚

注意

必ずお読みください

- この商品の対象年齢は15才以上です。〈鋭い部品がありますので、安全上15才未満には適しません。〉
- 小さな部品があります。口の中には絶対に入れないでください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭から被ったり、顔を覆ったりしないでください。窒息するおそれがあります。
- 小さなお子様のいるご家庭では、お子様の手の届かないところへ保管し、お子様には絶対に与えないでください。

- 〈組み立てる時の注意〉
- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
 - 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
 - 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
 - 部品の中には、やむをえず、とがったところがあるものもありますが、気をつけて組み立ててください。
 - 塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

■モノアイ
 A 18 F 14

■頭基部
 F 7 P.C(A) F 3

■モノアイ・カバー
 D 7 A 21

■指
 ※8組作ります。
 右: A 8 (左: A 9)

■肩
 ※2組作ります。

右: A 11 (左: A 12)

■ヒジ関節
 ※2組作ります。

M 6 (向きに注意!)

K 5 J 6 P.C(J) K 4

■上腕
 ※2組作ります。
 ※M 2は少し斜めに
 して奥まで入れます。

J 14 P.C(K) K 6 M 2 K 7

1 Head
 〈頭〉

■頭基部
 P.C(M) I 5

■モノアイ
 マーキングシール(2) F 4

■モノアイ・カバー

2 Shoulder Armor
 〈ショルダーアーマー〉

■右
 I 4 D 4 I 2

■左
 I 1 D 4 I 3

3 Manipulator
 〈手〉

■右手
 E 3 A 15

■左手
 A 14 E 4

■指(右)
 ■指(左)

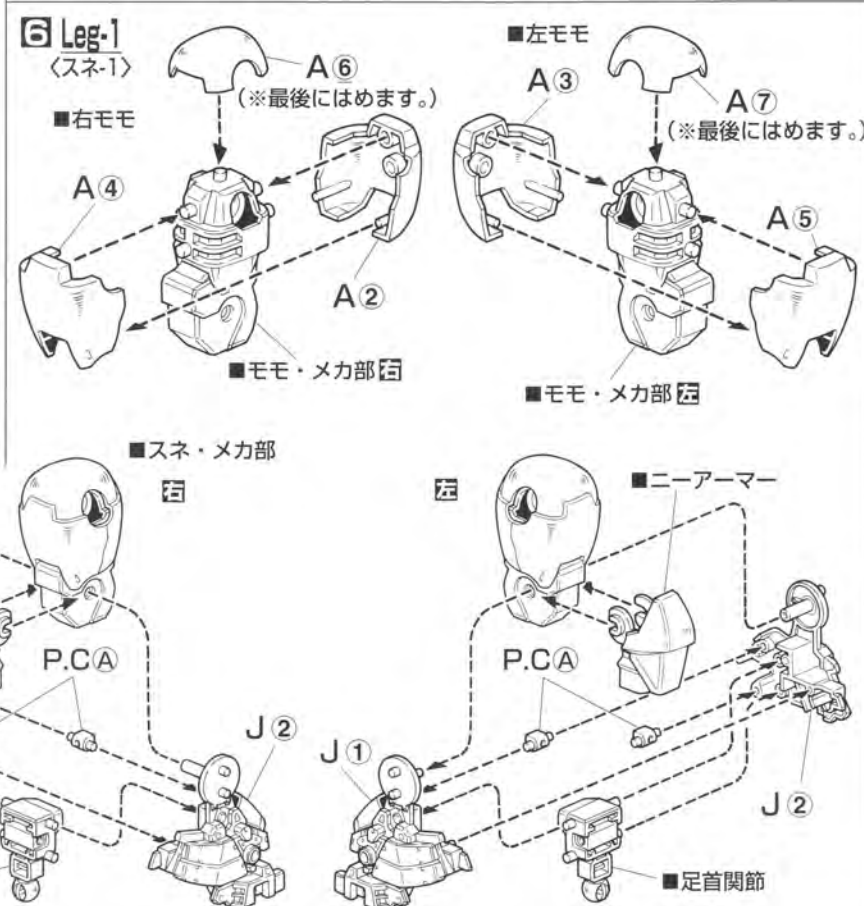
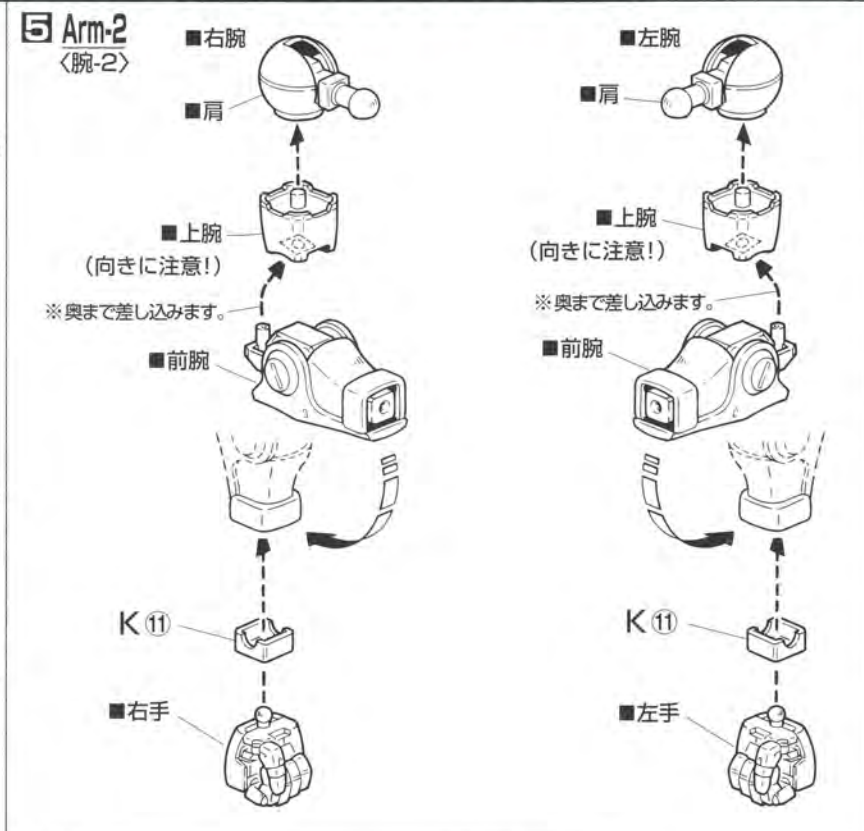
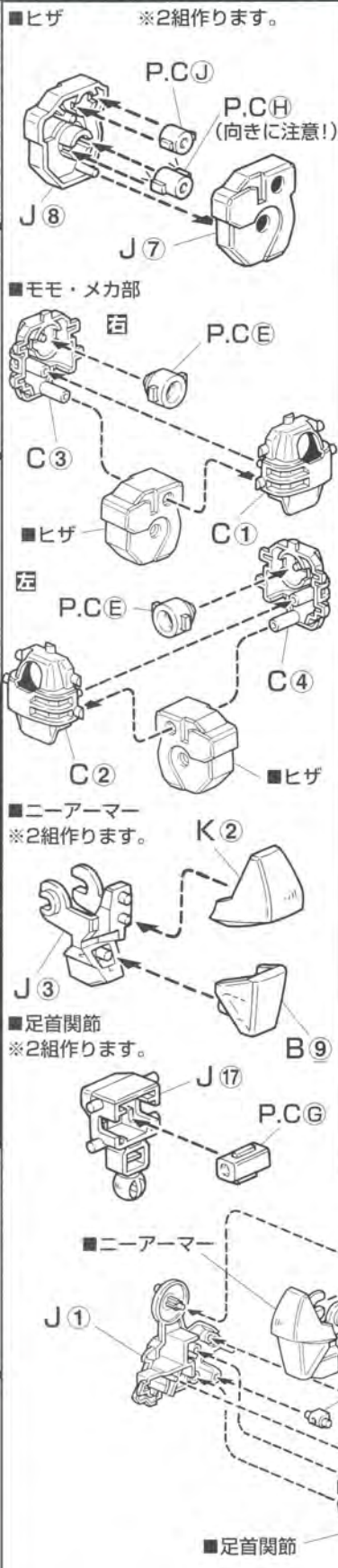
4 Arm-1
 〈腕-1〉

■前腕基部
 ※2組作ります。

■前腕
 ※2組作ります。

■ヒジ関節
 K 9 K 10 P.C(L)

■前腕基部
 K 13 K 14



HEAD UNIT

DO-H09/S.U004

MS-09のヘッドモジュールは、それまでのザクヤグフとは根本的に異なる形状を持っているが、モノアイのレール以外のユニットは基本的に同等の機能を持っており、それが高密度に実装されているだけなのである。



MS-09の特徴である頭部形状は、MS-07C-5の機体で初めて採用された二次元軌道をもつモノアイレールの開発によるもの。これによって地对空戦闘などにおいても上方視界を確保することができ、より地上戦に対応した設計が施されているといえるだろう。また、補助センサーの高性能化に伴い、側方視界はモノアイを使用しなくとも十分に捜索できることもあって、主センサーを側面に振り向ける必要がなくなったのだとも言われている。また頭部と胸部が一体化されている構造は、いわゆる被弾率を軽減し、敵の銃弾などを可能な限り跳弾させるためにも有効な手法であったようだ。



ARM UNIT

DO-A09/S.U002

MS-09は重力下における高機動性を追及した結果、“重モビルスーツ”に分類されるほど大型の機体となった。腕部は、それに準じたトルクと構造を持つが、それには“重力下”という環境も影響しているのである。

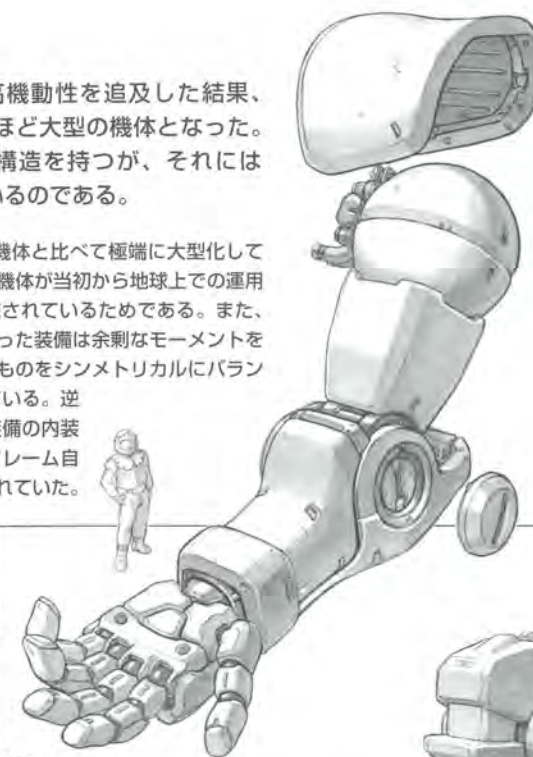
MS-09の腕部ユニットは、既存の機体と比べて極端に大型化しているように見受けられる。これは、この機体が当初から地球上での運用を想定しており、防塵処理が徹底的に施されているためである。また、高速移動の際、大型のシールドなどの偏った装備は余剰なモーメントを発生させてしまうため、機体の装甲そのものをシメトリカルにバランスさせた上で強化する方向で設計されている。逆に、各種スラスターなどの高速移動用装備の内装と、それに伴う構造強化などのため、フレーム自体に既存の機体を上回る堅牢さが求められていた。

LEG PARTS

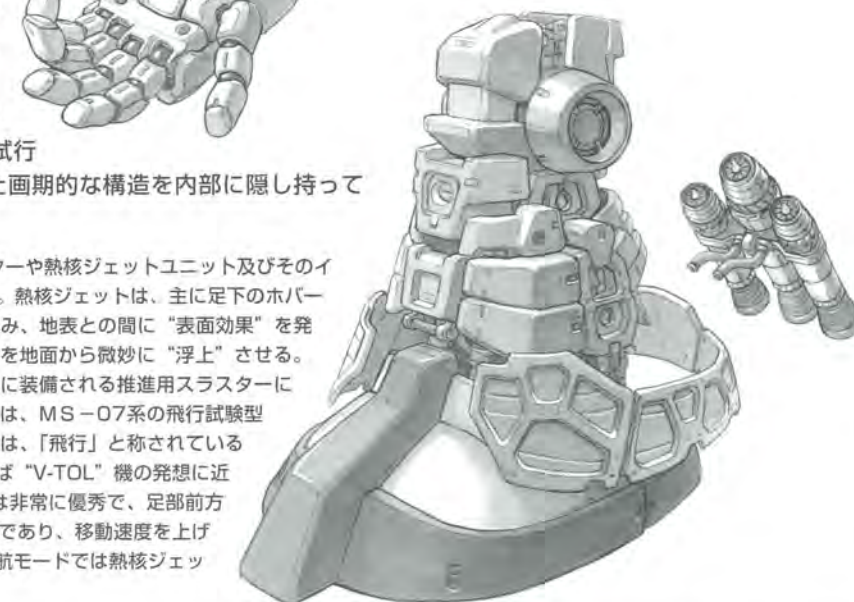
DO-L09/S.U007

MS-09の脚部は、既存のMSと比較して極端に異なる形状を持っている。これは、MSが重力下を高速で移動するための試行錯誤を繰り返した末に実現された画期的な構造を内部に隠し持っているためなのである。

MS-09の脚部は、推進用のスラスターや熱核ジェットユニット及びそのインテークなども装甲内に装備されている。熱核ジェットは、主に足下のホバーユニットに高温高圧の圧搾空気を送り込み、地表との間に“表面効果”を発生させることで対地摩擦を相殺し、機体を地面から微妙に“浮上”させる。そして、背部および腰部後方と脚部後方に装備される推進用スラスターによって機動を行うのである。同様の手法は、MS-07系の飛行試験型でも試みられていたが、この機体の傾向は、「飛行」と称されていることから判るように、どちらかと言えば“V-TOL”機の発想に近い物であった。MS-09のホバー機能は非常に優秀で、足部前方のセンサーによって不整地でも走破可能であり、移動速度を上げると表面効果も大きくなることから、巡航モードでは熱核ジェットのみでの走行も可能であったという。



これらのことから、自重そのものが增大するのは設計段階で判明しており、さらに加えて、並行して専用武器とも言える“ジャイアント・バズ”を装備することがほぼ確定していたため、それを支え、また、十分に取り回し可能なトルクを持つユニットとして、腕部自体のポリウムが大きく増大することとなったのである。また、直接打突戦闘に使うという想定もあったようだが、詳細は不明である。





TAKTIK FELD

U.C.0079年10月下旬、公国軍は、連邦軍がヨーロッパ地区で展開しようとしている大反攻作戦を察知していた。周辺地域での部隊統廃合や物資の動きが頻繁となっており、加えて、ガンダムを擁するホワイトベース部隊が、北米大陸から太平洋を超えてユーラシア大陸に侵入していたからである。公国軍は、母艦一隻と数機のMSのみで次々と自軍の包囲網を突破し、撃破していくガンダムの性能を高く評価し、この独立部隊を看過できない脅威として捕らえていた。ことに、地球攻撃軍司令のガルマ大佐を討ち取られた上、稀少金属を産出する拠点を奪還されることは何としても防がなければならなかったのである。ガルマの仇討ちと、ガンダムの撃滅を期して、キシリア少将は自らの切り札である「黒い三連星」を地球に派遣した。黒い三連星。幾多の死線をくぐり抜けてきたガイア、マッシュ、オルテガら三人は、連邦軍の「ニュータイプ」が駆るといふ「白い奴」との戦いに想いを馳せ、期待と不安に満たされていた。



SCHLACHT UNTER WALD

U.C.0079年11月07日。オデッサ作戦が発動した。戦闘は激烈を極め、それは昼夜に及んで展開されていた。日も落ちて、ホワイトベース部隊は補給を受けていた。レビル将軍の計らいで、新兵器は配備されたものの、母艦のエンジンが復調しないまま、ガンダムを始めとするホワイトベース所属のMSは出撃を繰り返していた。そんな彼らのもとに、夜陰にまぎれ近づく三機の機体があった。ガイア、マッシュ、オルテガらの駆る三機のドム。黒い三連星が、ホワイトベースが身を潜める木立を縫って急襲してきたのである。これまでに戦ったどのMSとも違う機体は、その戦い方までが圧倒的に違っていた。高速で移動する三機のドムは、強力な砲撃と執拗な波状攻撃によってアムロたちを翻弄し、徐々にホワイトベースとの間合いを詰めていった!!



LETZTE KAMPF

U.C.0079年11月08日未明。ホワイトベース部隊を「黒い三連星」が襲った。彼らは三機の重MSドムによる三位一体の波状攻撃、必殺の「ジェット・ストリーム・アタック」を仕掛けるものの、その隙間をすり抜けるガンダムの戦いぶりに舌を巻いていた。戦いのさなか、黒い三連星を率いるガイアは確信していた。あの「白い奴」は「ニュータイプ」に違いない! それでも、自分の方が戦い慣れている。もう一度同じ攻撃を仕掛ければ確実に「ガンダム」を仕留められるはずだ! ともに戦場を駆け抜けてきた二人の相棒、マッシュとオルテガも心得たものだった。黒い三連星は再び、会心の、そして、最後の必殺技を繰り出した……!!

MARKING



▲機体各部をリアルに再現するナンバー表記、注意書き等のマーキングシールをセット。形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。

WEAPONS



Pilot ortiga

黒い三連星のパイロット、オルテガを1/20スケールのフィギュア(人形)で再現。



PAINTING

※よりリアルに仕上げたいかたは、下の基本色をご覧ください。
※塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

- 腕・脚などの塗装色。
パープル(60%) + ホワイト(30%) + ミディアムブルー(10%)
- 肩・膝スカート・足底などの塗装色。
ミッドナイトブルー(90%) + ブラック(10%)
- 胸・背部などの塗装色。
ニュートラルグレー(90%) + レッド(5%) + ネービーブルー(5%)
- 武器などの塗装色。
ミディアムブルー(60%) + ニュートラルグレー(30%) + レッド(10%)
- 関節部などの塗装色。
ニュートラルグレー(80%) + ミッドナイトブルー(30%) + レッド(10%)
- モノアイカバー・スカート裏などの塗装色。
モンザレッド(60%) + シャインレッド(40%)



FRONT VIEW



REAR VIEW



◀コクピットハッチの開閉ギミック、内部メカニクのディテールを再現。
▼背部装甲は内部メカニク及びバーニアをリアルに表現。

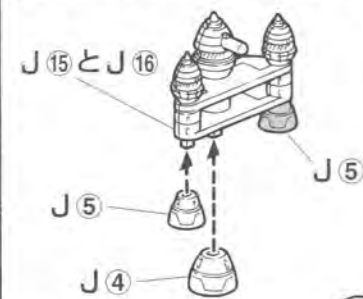


▲ホバーユニットを表現したメカニクディテール、レッグカバーはフレームやジェットユニット等、内部メカニクをリアルに再現。

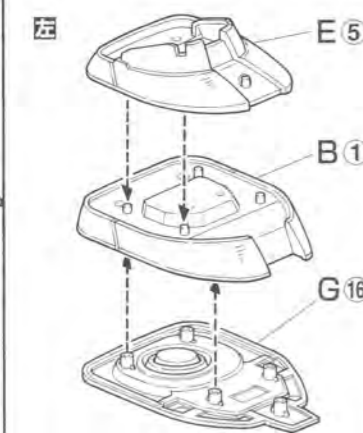
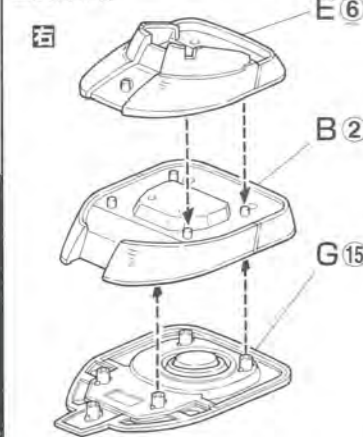


▲シュツルム・ファウストを装着するマウントラッチを再現。

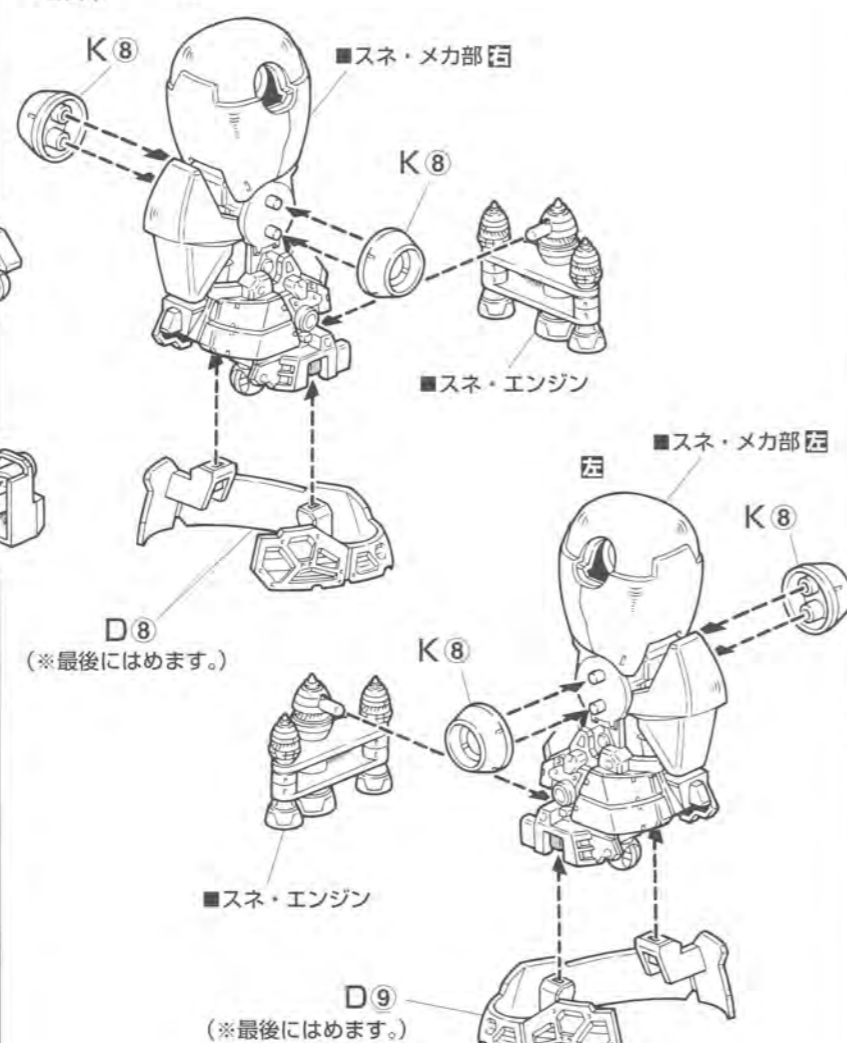
■スネ・エンジン ※2組作ります。

■足首・メカ部A
※2組作ります。■足首・メカ部B
※2組作ります。

■足首本体

7 Leg-2
(スネ-2)

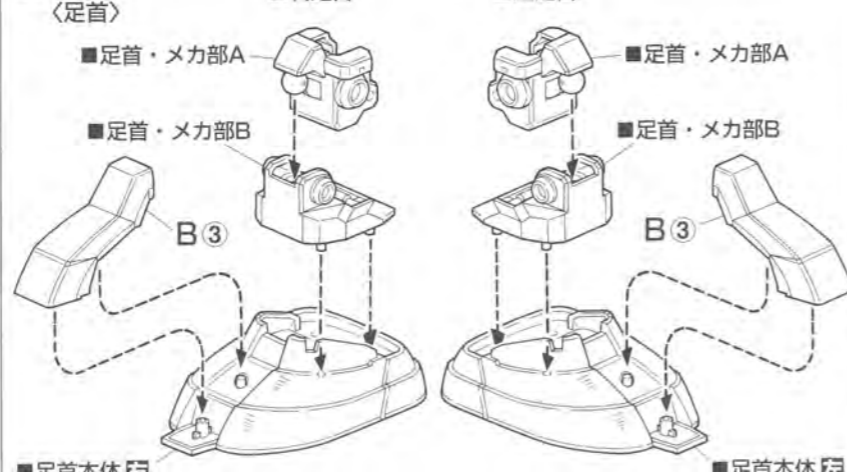
■スネ

D 8
(※最後にはめます。)

■スネ・エンジン

D 9
(※最後にはめます。)8 Ankle
(足首)

■右足首



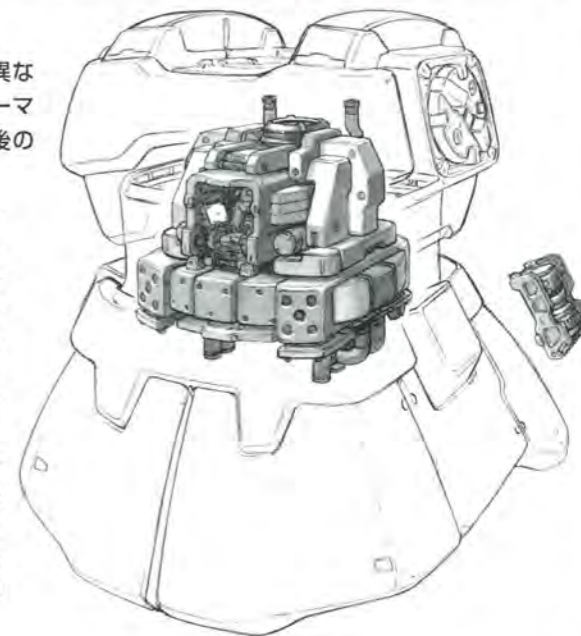
■足首本体

■足首本体

COCKPIT

MS-09のボディユニットは、既存の機体とは根本的に異なった構造を持っている。ことに特徴的なのは、“スカートアーマー”と称される腰部ユニットである。このシルエットは、後の公国系MSの特徴ともなっていく。

MS-09のボディブロックは、それまでに採用されてきた“ザク”や“グブ”の構造とは一線を画した物で、ジェネレーターブロックと胸部、腰部を別ブロックに分割し、機体可動やメンテナンス、機能向上に配慮した設計となっている。この構造は、後に開発されるMSにも採用されており、特に構造的にスラスターなどを取り囲むように設計された“スカートアーマー”は、MSの立ち所であった部位の被弾率を圧倒的に低減させた。また、コックピットブロックは、ザクより後のほとんどのMSに採用されているダイレクトインと呼ばれる搭乗方式となっており、前面装甲の立ち所であった搭乗ハッチが飛躍的に強化されている。ただし、砂漠や湿地帯などに展開している部隊からは、昇降の際にコンソールが汚損しやすいなどの苦情も少なからずあったらしい。ちなみに、脇腹の拡散ビームジェネレーターは、当初ビーム兵器用のエネルギーサプライターミナルとして設置されていたらしいのだが、ビーム兵器自体の開発が遅れていたため、善後策として幻惑用の欺瞞装備が増設されたと言われている。



WEAPONS

H&L-GB03K/360mm
VAL-RB-T27/880mm
HEAT SABER Type2
MMP-80/90mm Ver.8
MarkVIII Sturm Faust

MS-09ドムが使用する武装のうち、もっとも特徴的なものが、戦艦をも一撃で撃沈すると言われるほどの威力を持つ“ジャイアント・バズ”である。この武装を始めとして、ドムにも様々な兵装が供給されている。ジャイアント・バズは、実際に対艦戦闘において高い戦果を挙げており、ドム以外の機体にもこそって使用されたと言われている。



360mmGB03K BAZOOKA

このバズーカは、一年戦争時に使用されたMSの携帯用としては最大級の武装。別名“ジャイアント・バズ”と呼ばれ、大戦末期にはドム以外の機体でも多用された。

880mmRB-T27 BAZOOKA

弾頭が推進剤を消費して飛翔する、いわゆるロケットバズーカ。砲身に設置されたレーザーデバイスで、近距離ならばかなりの精度で誘導できる。ちなみに“880ミリ”は弾頭の全長を表している。

MS用MACHINE GUN
一年戦争後期に使用されたMS用マシンガン。90mm実体弾を射出する。

HEAT SABER

MSの白兵戦用の武器。サーベル部分が白熱化し、敵の機体を溶断する。発熱デバイスは高効率でエネルギーを熱に変えるが、消費が激しく基本的に使い捨てである。

Sturm Faust

一年戦争後期に多用された、使い捨てのロケットランチャー。

PILOT



ORTIGA「オルテガ」

陸戦用の重MSとして知られるMS-09ドムは「黒い三連星」として知られるガイア、マッシュ、オルテガらの特務部隊によって初の実戦投入が行われた。ルウム戦役において連邦軍のレビル将軍を捕縛した戦歴を持つ彼らは、突撃機動軍の中であって、キシリアの切り札的な存在だったと言われている。

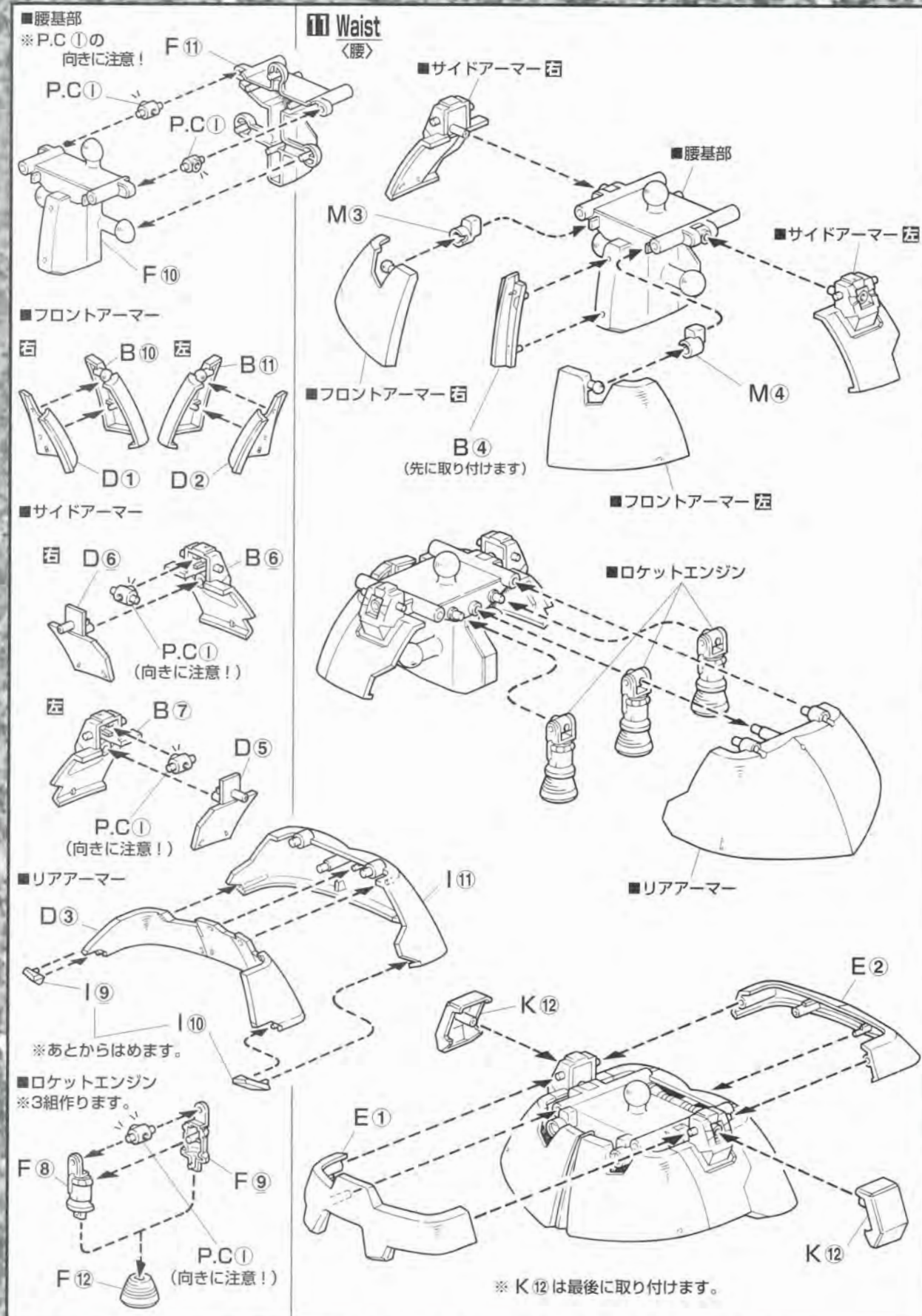
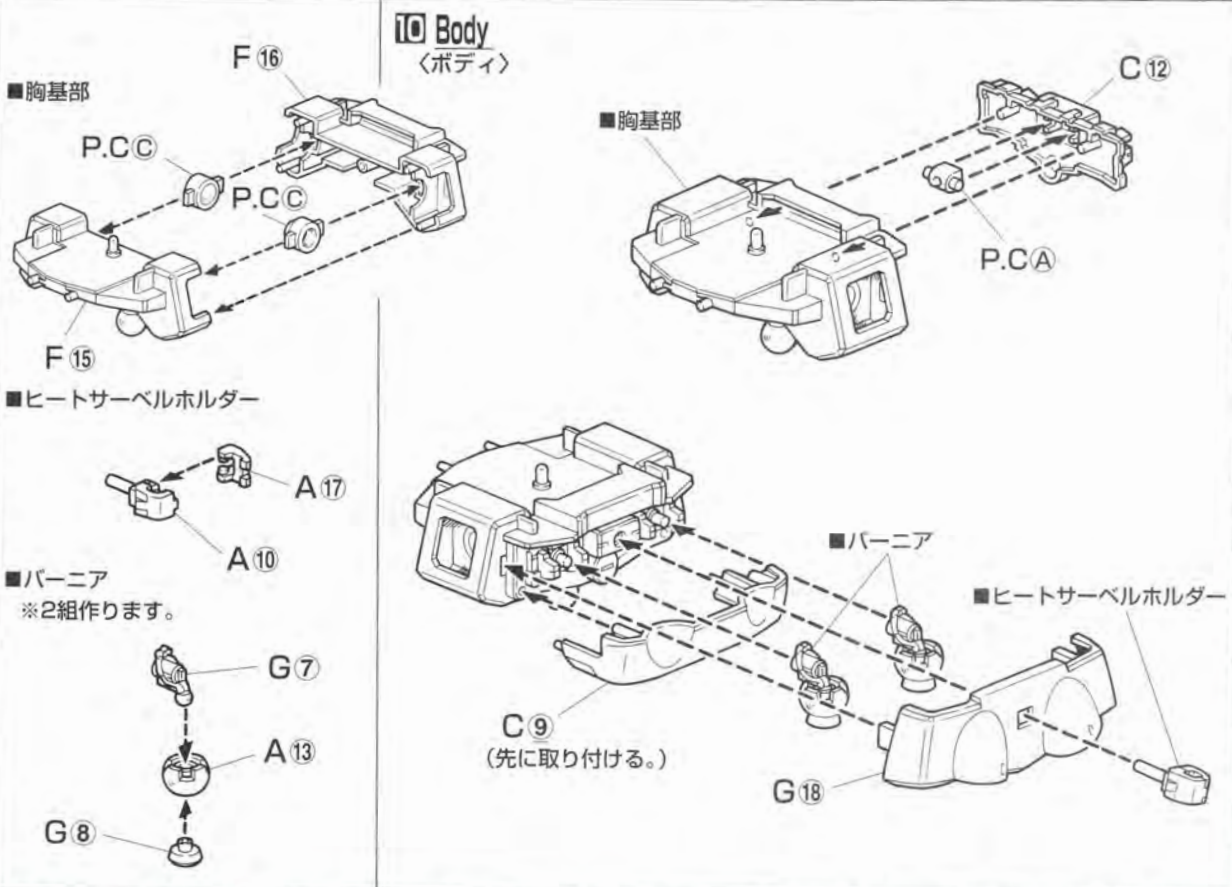
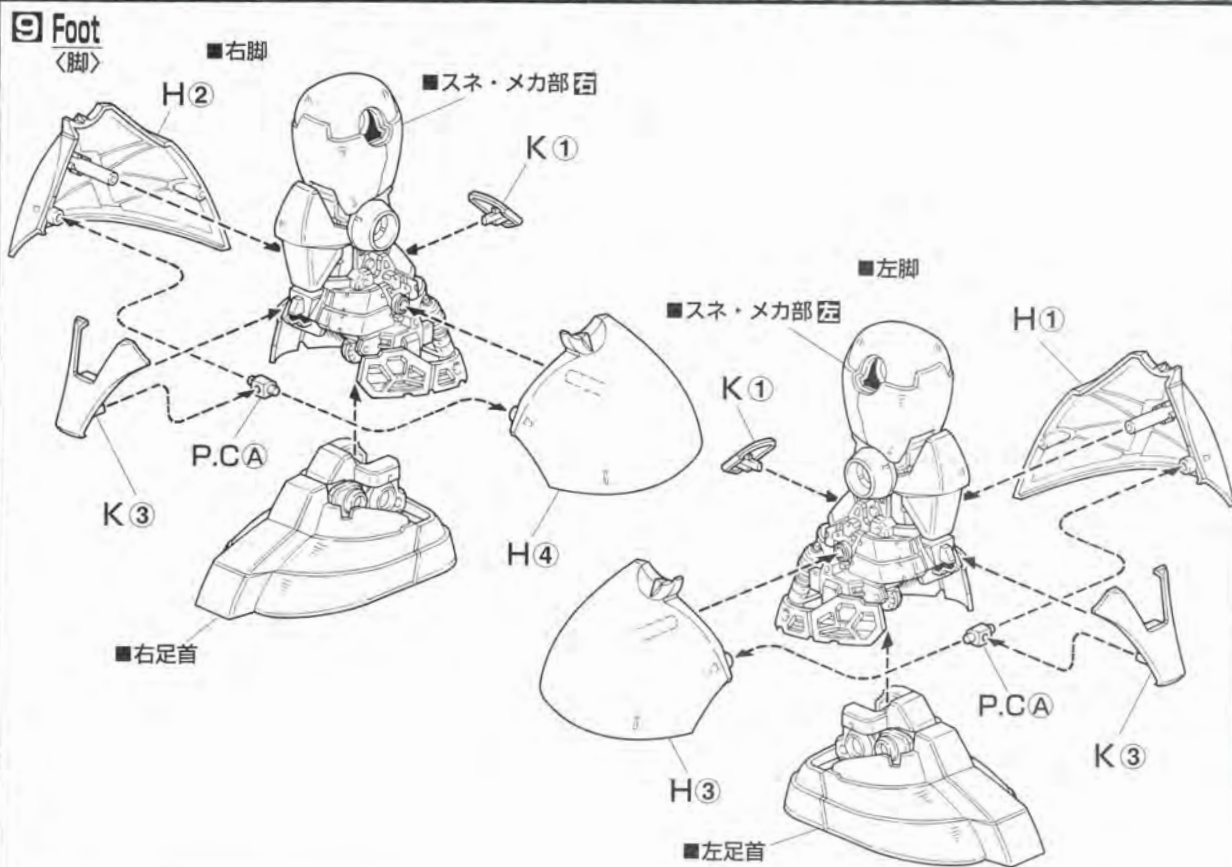
0079年10月、グラナダ及びコロニーにおける陸戦レーニングを終えた後、彼らはオデッサ作戦に備え、地球に降下する。その際、彼らに与えられた機体が、陸戦用の最新鋭機である“ドム”であった。彼らは短期間の内にこの機体乗りこなし、勇躍、連邦軍の“白い奴”との戦いに挑んだ。

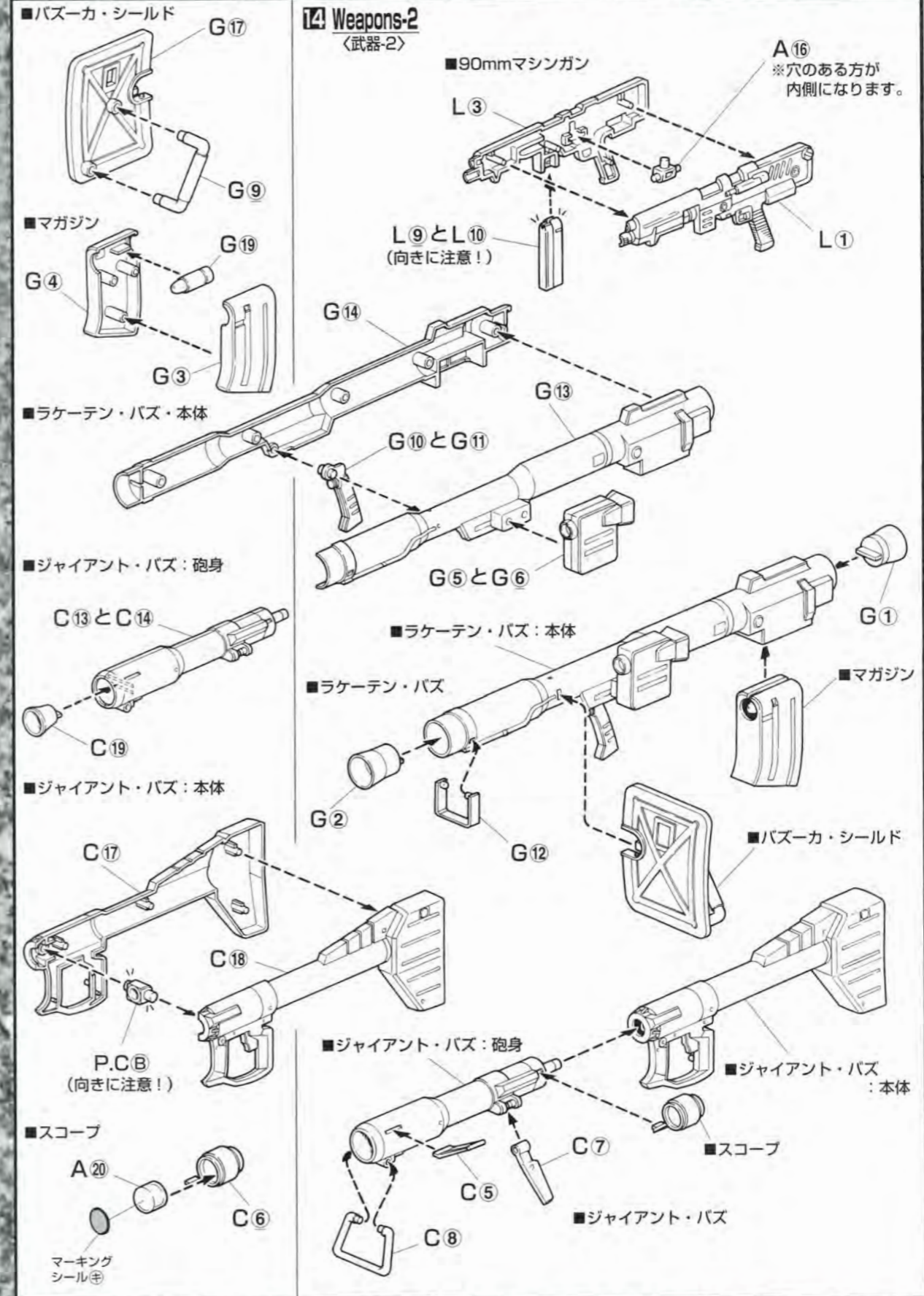
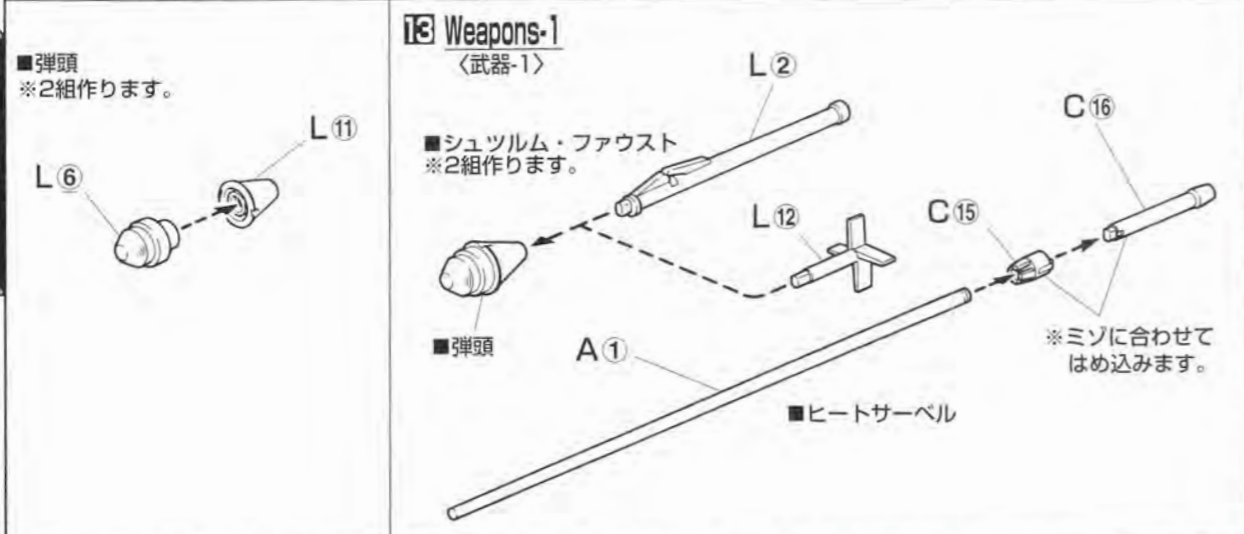
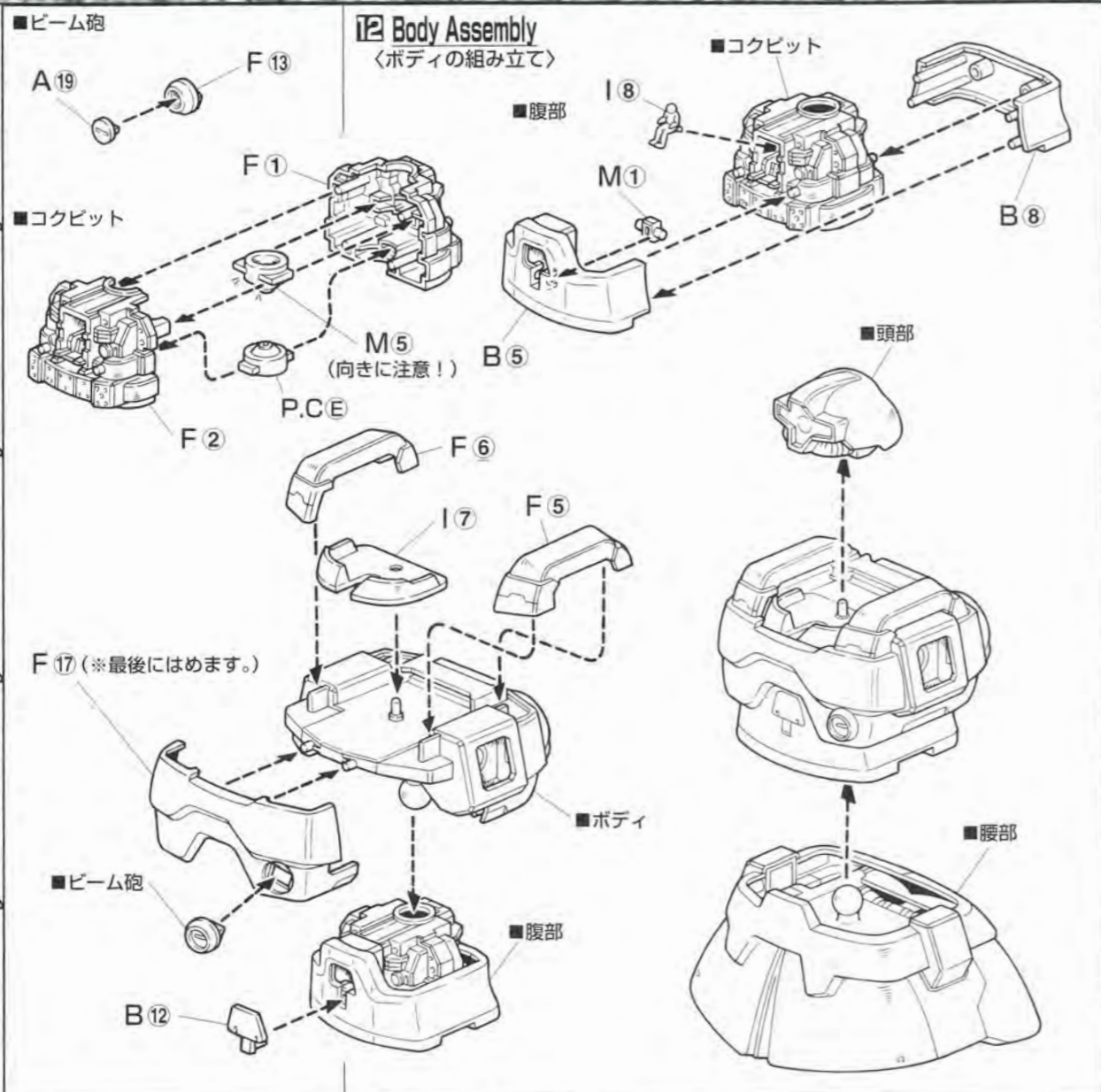
同年11月07日、連邦軍によるヨーロッパ地区奪回を賭けた“オデッサ作戦”が展開された。その戦艦のさなか“ガンダム”を擁するホワイトベース部隊との戦闘によって、彼らは全滅している。

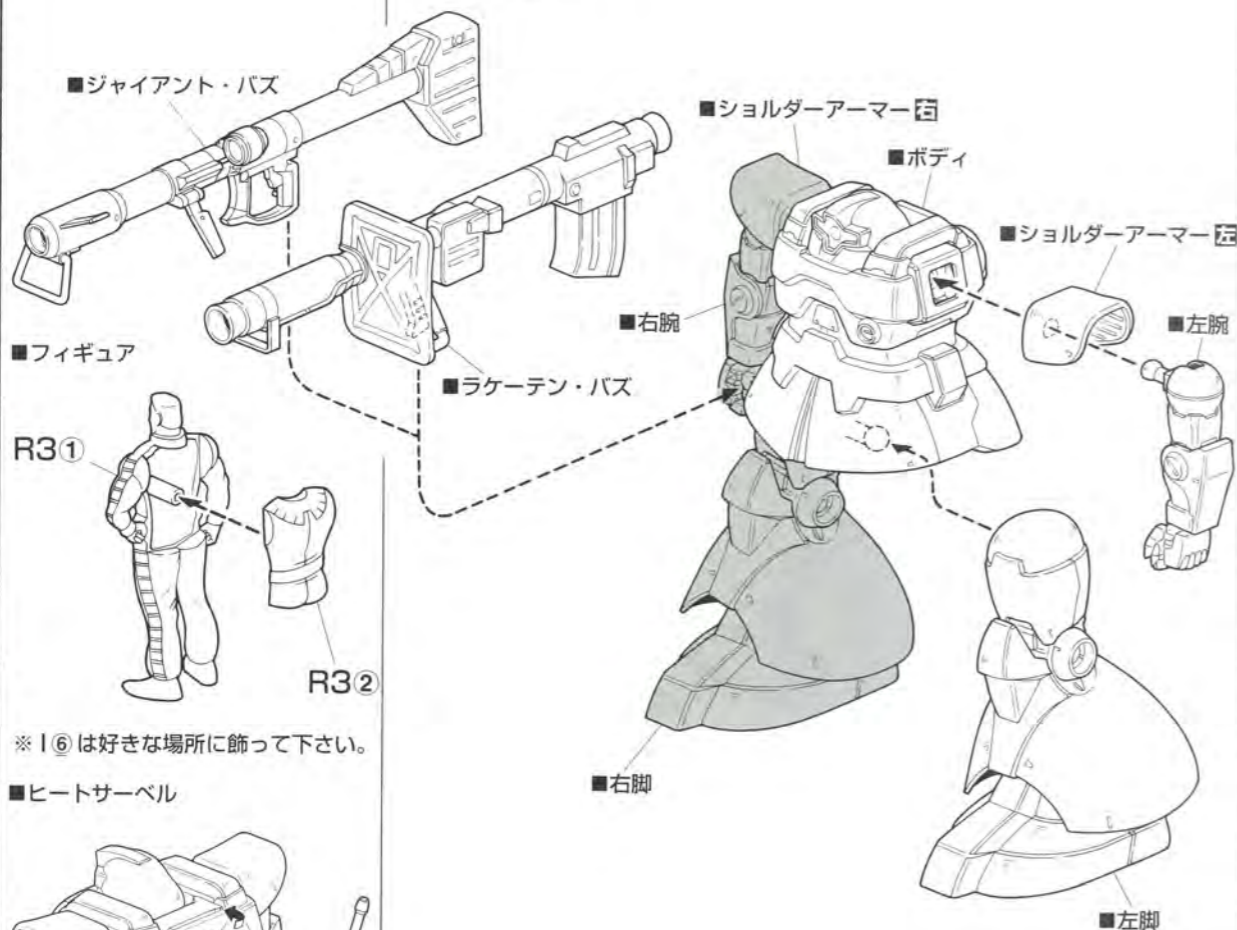
■黒い三連星



メンバー、左からオルテガ、ガイア、マッシュの三人。三人一組で、連携した戦いを行っていた。



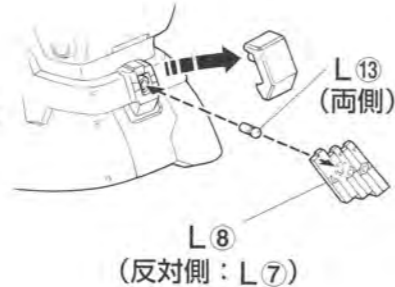


15 Final Construction
(完成)

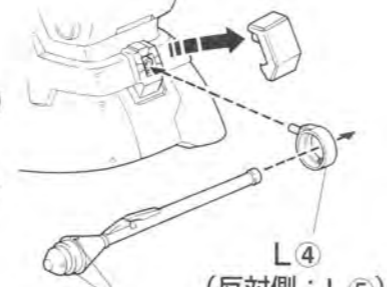
■90mmマシンガン



■マガジン



■シュツルム・ファウスト



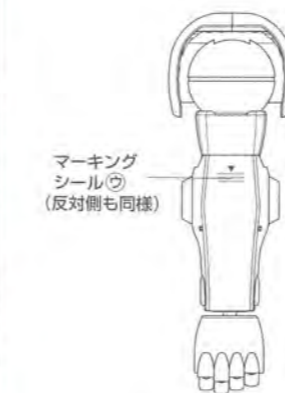
※ミゾに合わせて通す

Seal
(シール)

下の図を見て、ガンダムデカールやシールのはり位置を確認してください。

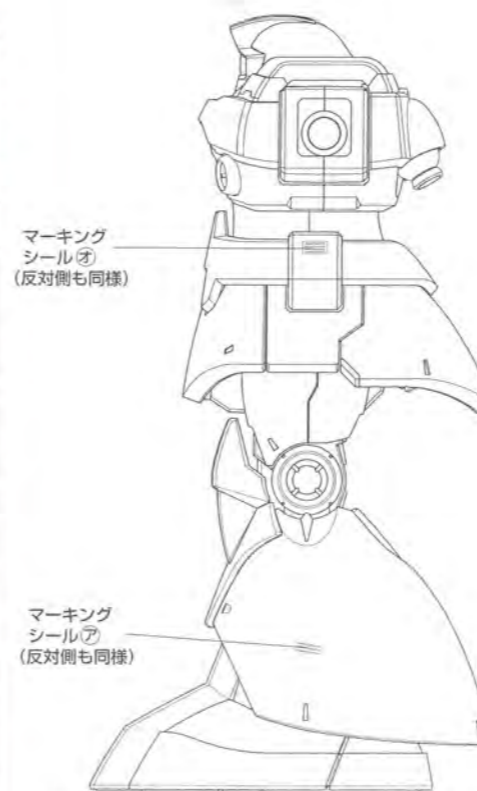
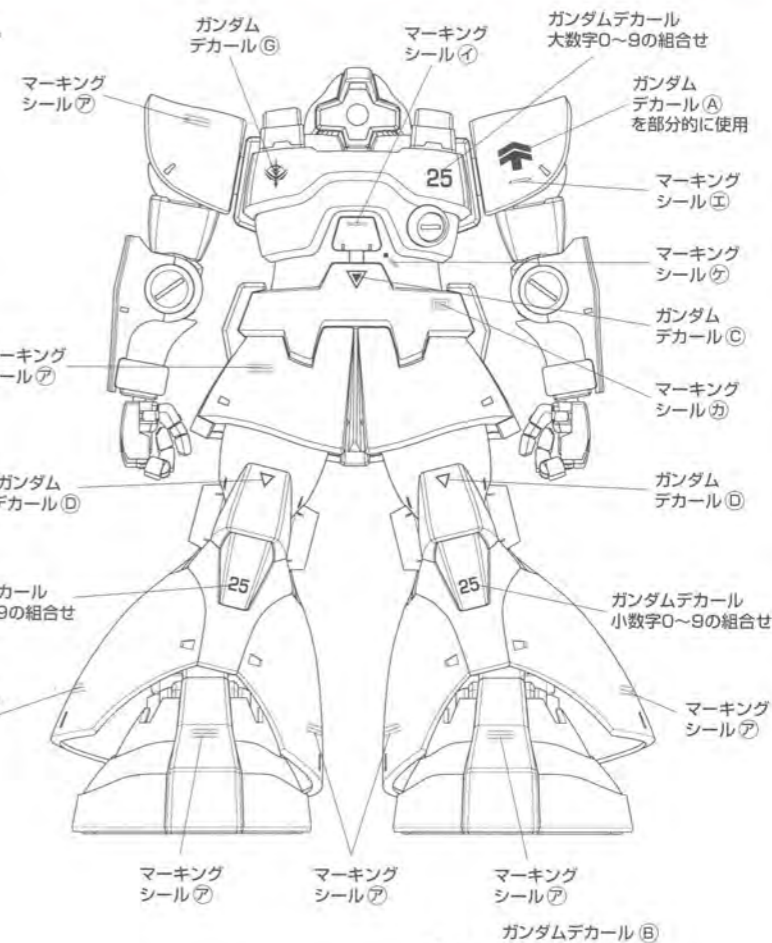
ガンダムデカールのはりかた。

- 1.転写するマークを大きめに切ります。
- 2.転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
- 3.シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。



マーキングシール⑧ (反対側も同様)

マーキングシール⑨ (反対側も同様)



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。